

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」について

【構成資産】

原城跡，平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳^{やすまんだけ}），平戸の聖地と集落（中江ノ島^{なつかのしま}），外海の出津集落，外海の大野集落，黒島の集落，野崎島の集落跡，頭ヶ島の集落^{かぶらがしま}，久賀島の集落^{ひさかじま}，奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺），大浦天主堂（以上長崎県），天草の崎津集落（熊本県）

【概要】

本資産は、16世紀にキリスト教が大航海時代を背景に極東の国日本へ伝来し、その後の江戸幕府による禁教政策の中で「潜伏キリシタン」が密かにキリスト教への信仰を継続し、長崎と天草地方の各地において厳しい生活条件の下に、既存の社会・宗教と共生しつつ、独特の文化的伝統を育んだことを物語る貴重な証拠である。

潜伏キリシタンの文化的伝統が形成される契機となる出来事が考古学的に明らかにされている原城跡，潜伏キリシタンが密かに信仰を維持するために様々な形態で他の宗教と共生を行った集落（平戸の聖地と集落・天草の崎津集落・外海の出津集落・外海の大野集落），信仰組織を維持するために移住を行った離島部の集落（黒島の集落・野崎島の集落跡・頭ヶ島の集落・久賀島の集落・奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）），潜伏キリシタンの伝統が終焉を迎える契機となった出来事が起こり、各地の潜伏キリシタン集落と関わった大浦天主堂から構成される。

【暫定一覧表記載年】平成19（2007）年



原城跡



天草の崎津集落



大浦天主堂

